



CONTENTS

Top Opinion

1

大和心（やまところ）に触れて

新宿南エネルギーサービス(株) 代表取締役社長 小林 千佳

VOICE

2

新入社員の頃の悩み

J R東日本 竹内 美礼

たすきリレー

3

気になる話題2つ（自筆の計報・18歳と81歳の違い）

オックスジャッキ(株) 土井 博巳

国際データ比較

P F 書店／私のインフラ巡礼／編集後記

4

Top Opinion

大和心（やまところ）に触れて

新宿南エネルギーサービス(株) 代表取締役社長 小林 千佳

「（一社）土木技術者女性の会」の有志で古事記の読書会を始めて5年となります。月に1度、土木・女性・技術者という共通点のみで世代も職業も異なる数名が車座になり順番に朗読しています（コロナ禍以降はオンライン開催）。題材として「新釈古事記伝」には大和心の様々な教えが示されており、参加者と読後感を共有し深く味わっています。天照大御神・須佐之男命・大国主命などの神々が登場するお話しの随所で「大和心」に触れており、幾つかご紹介させていただきます。



まず「袋背負の心」で大国主命は旅道具の数々を大きな袋に入れて独り背負い、八百万の神々の後を歩きました。大黒様のニコニコ顔で、沢山の人の荷物を背負うことを喜びとし見返りを求めず人のためになることを大切にする文化こそが大和心、と学びます。また、須佐之男命は、父神より命ぜられた現世の開拓（基盤整備）が困難なあまり「泣きいさち」状態となっていたものを、天照大御神の指導などを仰ぎながら「みたま鎮め」をして自らの使命の尊さ・本質を悟ります。自分の私利私欲だけを重んじて使命の本質が見えないと本当の仕事をしたことにならないという教えも大和心に通じます。有名な「おこもり」では、天照大御神を引き出す相談での仕切り役として「思兼神」が活躍します。他の神様が自らの受持ちに執着するなかで調整役に徹し全体を見渡す能力で課題解決を図ろうとする姿も大和心に通じ土木屋の役割とも重なります。

ほんの一例ですがこのように祖先の魂・大和心に触れつつ社会基盤を子孫に受け継いでいくという自分達の受持ちにも気付かされ、参加者で共有しています。SDGsの取組み、DX推進、グローバル化、エネルギー問題など変化が激しい時代に、「故きを温ねて新しきを知る」古事記を味わってみてはいかがでしょうか。

参考文献：「新釈古事記伝（全七巻）」阿部國治著・栗山要編（致知出版社）



私のインフラ巡礼



～ヴィラ・クウクウ～

渋谷区の閑静な住宅街に佇む吉阪隆正設計の代表作

（J R東日本 木戸 秀一さん）

未来構想PFのホームページ（HP）をご覧ください。

会員はもちろん社会に大きく開かれた「参加型」HPです。

未来構想 P F

検索

で検索してください。

トップページへのリンクは

[こちら](#)



VOICE

新入社員の頃の悩み

J R 東日本 大宮支社 竹内 美礼

もう20年以上前になるが、新入社員の頃、自分の中で解決できない課題があった。今思うと大した話ではないのかもしれないが、当時の自分としてはそれなりに深刻な課題だった。それは、自分の業務内容を一般の人（業界の外の人）にどうわかりやすく理解してもらうかということだった。

話し相手が、私の勤務先が鉄道会社と知っている場合、「JRの人？」その次は決まって「駅員さん？運転士さん？車掌さん？」などと矢継ぎ早に質問された。だいたい鉄道会社勤務と知ってイメージされるのは、駅員、運転士、車掌のどれかである。入社したてで詳しい話もできず、当時単独立体交差事業を担当していた私は、試行錯誤しながら鉄道会社の建設土木系の仕事を不器用に説明すると、相手からはあまり納得していない感じで「へえ～」と薄いリアクション。続けて「でも実際に（建設工事現場で）作業をしたりするわけではないんですよ」と言われ、私もどう答えてよいかわからず、うまく説明できない自分にもどかしさを感じていた。

同じようなことは何度か起こった。特に私の住んでいた社員独身寮近くの商店（散髪中の理容師など）の人との会話、あるいは若者特有の性別を超えた交流の場などで直面したが、そのたびに、私の説明に対する相手の納得感は薄く、自分自身スッキリしない気分となった。簡潔でわかりやすい説明方法は無いかと悩みつつも、ほどなく仕事も忙しくなったこともあり、当時抱えていたいくつかの課題としては優先順位は高くなかったのも、いつの間にか自分の中で棚上げになっていた。

それから10年以上が経過し、読書の習慣が多少身についてきたころ、会社の同期から一冊の本を薦められ読んだ。本のタイトルは「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」、作者は村上春樹さん。この小説の主人公の多崎つくるとは、新宿に本社のある電鉄会社の社員という設定で、駅の改良工事を担当している。小説の中盤あたりで、主人公が駅のバリアフリー化の検討をするために現場調査を行って、駅長と打ち合わせをする場面が登場する。そこには、主人公が、旅客流動への影響や周囲の構造物への影響などを意識しつつ綿密に計画を

作り上げていく様子、また世間話も交えながら駅を管理する駅長と信頼関係を構築していく様子が描かれている。当時、私は複数の駅のバリアフリー工事を担当していたこともあり、このシーンをとてもリアルに感じた。

そして、わずか3、4ページの中に、業務内容と勤所が、専門用語を使わずに簡潔にまとめられると同時に社会的に重要な業務であることが滲み出されていることに感動してしまった。正直に言って自分勝手ながら、我々の仕事ノーベル文学賞候補者をはじめ社会一般から認められているような満足感を覚え、自信にもつながった。

読了後に新入社員の頃を思い出した。業務内容を尋ねられた時に、村上春樹さんのような表現ができないのは当然であるが、せめて「私の仕事は『多崎つくると』のような仕事です」と答えればどれだけ楽だったかと思ってしまった（この本が発売されたのは2013年なので、入社時にはまだ存在しなかったが）。

ただ、今はそんなことに思い悩む必要はなくなっている。なぜなら大規模な線路切換工事がNHKのゴールデンタイムにドキュメントで紹介されたり、各種現場見学会の開催やSNSでプロジェクトを紹介する配信が盛んにおこなわれており、一般の方々に我々の業務を知っていただく機会が増えているからである。社会からの認知度があがるというのはとてもありがたいことである。恐らく認知度を上げるために我々の仕事を一般に触れる機会を増やすことにエネルギーを割いていただいている方々がいるのだと思いに至り、改めて感謝したい。また一方で認知度が上がっても期待を裏切らないプロジェクトを我々がたくさん生み出していることも自信を持っていいのだと思う。

これからも多崎つくるとのように実直に几帳面に鉄道改良工事に携わっていきたい。





たすきリレー

気になる話題2つ（自筆の訃報・18歳と81歳の違い）

オックスジャッキ(株) 顧問 土井 博己

後期高齢者に仲間入りして2年目になる。健康上の問題は特になく、時々だが会社からの依頼を受け、手伝いと称して出かけることがある。高齢者に必要なモノは教養（今日用事がある）と教育（今日行くところがある）と言われており、まあ幸せ者である。そんな平々凡々とした生活なかで最近気になった話題2つを以下に紹介する。

■自筆の訃報

近年、「高齢となり今後の年始のご挨拶は遠慮したい」「今後はメールで」こんな年賀状をしばしば受け取る。年に一度の近況報告である年賀のやり取りも億劫になるのは、やはり年齢のせい。そんな時、ある記事を目にした。生前書き留めておいた賀状を、没後に家族が郵送したとのこと。

年末、1通のはがきが届いた。差出人の女性の名前には心当たりがない。不審に思いながら裏面に目をやると、長年見慣れた文字で「前略私儀 ○○年○○日、死去いたしました」という文字が。故人本人からの手紙だった。○○のところだけ字体が違う。

・・・（中略）・・・

三十数年間会うことはなかったが、毎年の賀状のやりとりでお互いの

・・・（中略）・・・

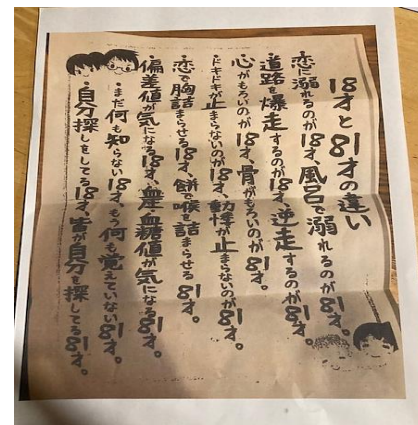
はがきは随分前に書かれていたようで、52円のはがきには10円と1円の切手が貼られていた。「父が生前用意しておりました。生前のご厚誼に深く感謝申し上げます」との添え書きが。故人をしのびつつ、最後に頂いたお手紙がご自身の訃報となったことに胸が熱くなった。合掌。

記事のリンク先↓

[産経新聞2023.01.19に掲載された“朝晴れエッセー”抜粋](#)

■18歳と81歳の違い

まだお元気な先輩諸氏には縁遠い話だろうが、目にしたとき、うんうんとうなずくことばかりで思わず笑ってしまった。まてよ、笑ってばかりではいけない、81歳まであと5年。自分がその年齢になったとき、いったい、18歳とどんな比較になるのだろう。



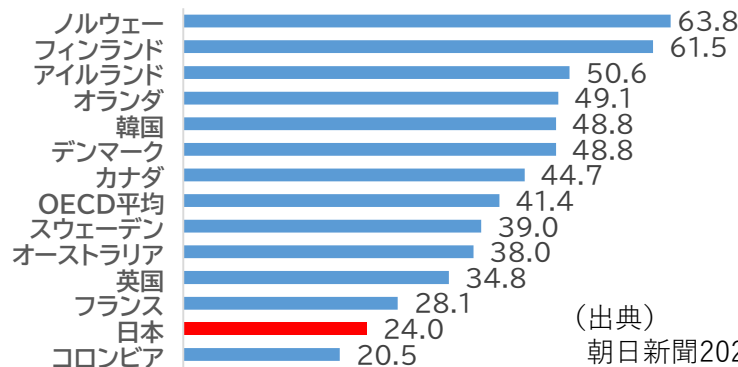
今月の国際比較データ



●政府への国民の信頼度

異次元の少子化対策が話題になっているが、その財源をどうするかが大きな課題である。社会保険料を使う案も浮上しているが、賛否両論、しばらくはまとまりそうもない。政府がお金を集め必要に応じて配るには国民からの信頼が欠かせないが、日本は低い。

OECDによる21年の調査で、「政府を信頼する」と回答した人の割合は日本が24%。20か国の平均41%を大きく下回り、コロンビアに次いで2番目に低かった。信頼感の薄さは、子育て支援に限らず社会保障の充実を阻む最大の壁かもしれない。



（出典）

朝日新聞2023.05.01



PF 書店



本の題名をクイックすると、出版社の書籍紹介HPにリンクします！

① ぼくは古典を読み続ける (出口 治明 著 光文社)

古典を読めば、人間がわかる。考える力がつく。世界とつながる。出口治明氏の伝説の白熱講義を書籍化したもので、数多くの古典の中から、「種の起源」「ソクラテスの弁明」「地底旅行」「市民政府論」「歎異抄」の5冊をセレクトし、その読み方、楽しみ方をくまなく案内している一冊。人間が過去に残してきた記録をしっかりと読めば、世界で起きているいろんなことが理解できるというのが、古典を読む一番大きな理由。あわせて読みたいブックガイドから、受講者の方との質疑応答の応酬まで、講義の熱気がそのまま本に詰まっている。

② 亡命トンネル29 (ヘレナ・メリマン著 河出書房新社)

世界中が注目したベルリンの壁崩壊からすでに33年。東西ドイツが統一してから32年が経過し、冷戦時代の記憶は過去のものとなりつつある。約20年前にドイツで映画化もされたトンネル・プロジェクトに関して、著者のメリマン氏が亡命希望者を救出するためにベルリンの壁の下を通るトンネルを完成させた西の人々や、実際にそのトンネルを使って亡命した人々について、膨大な資料とインタビューを基にまとめたノンフィクションである。プロジェクトに関わった人々の気持ちが鮮明に描かれており、非常に読みごたえがあるだけでなく、臨場感あふれる物語にもなっている。

③ ラブカは静かに弓を持つ
(安壇 美緒 著 集英社)

主人公は音楽著作権管理団体に勤め、ごく平凡に日々の業務をこなしている会社員。そんな主人公が音楽教室への2年間の潜入調査を命じられるところから物語の幕が開く。調査の目的は、音楽教室が著作権法の演奏権を侵害している証拠をつかむこと。そのような使命がありながら、人と人との出会い、時を重ねて音楽教室の講師と生み出される信頼という感情。そのかけがえのなさが、チェロの深い響きとともに真っすぐに胸を打つ「スパイ×音楽」な物語となっている。



Top Opinionで小林様に紹介いただいた書籍がこちらです。



私のインフラ巡礼



「ヴィラ・クックウ」 (東京都渋谷区)

渋谷区の閑静な住宅街に佇む「ヴィラ・クックウ」は1957年に竣工した吉阪隆正設計の代表作の住宅です。吉阪は現代建築の巨匠ル・コルビュジエのアトリエに勤務したのち、早稲田大学教授や日本建築学会会長を歴任した建築家であり、登山家としても名を馳せました。この住宅には氏のアルピニスト仲間が50年間余り住みましたが、昨今老朽化などにより取り壊しもさやかれていました。そのような中、俳優の鈴木京香さんが本建物を買い取り一般公開も視野に入れ改修・保存したことが話題となり、建築の文化的価値に大きく貢献したことが高く評価され、日本建築学会文化賞を受賞されました。コルビュジエの影響が色濃く残る建築物が一般公開されることはとても楽しみです。

(J R 東日本 木戸 秀一さん)



編集後記

5月8日に新型コロナウィルス感染症の位置づけが2類相当から5類へと変わりました。3年前の緊急事態宣言中、街から人がいなくなり先の見えない不安でいっぱいでしたが、最近は外国人観光客やマスクを外す人が街中に増え、少しずつコロナ前の様相を思い出してきました。早くコロナ禍の経験を笑い話にできるような日が来ることを望んでいます。(S.K)

プラットフォーム通信では、メンバーの皆様の投稿をお待ちしています。

連絡先：未来構想 PF 事務局 大口

電話：03-4334-8157 メール：info@miraikoso.or.jp

〒100-6005 東京都千代田区霞が関 3-2-5 霞が関ビル 5F-28